



第五回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

応募総数

小学生の部 300作品

中学生の部 378作品

審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

楽しい声

三木卓

こども文学賞も、五年目を迎えました。日本のあちこちから応募が来るようになり、その多様な声がとても楽しかったです。

小学生の部では、工藤志生さんの「おとのちから」が大賞。工藤さんは、緑のふかいところへ旅行をしたんでしょうか。深い自然のなかで夜をすごしたときの森のものおとを、しっかり受けとめました。いい耳と心。

中学生の部では、宮原さやかさんの「お祭りの夜」が大賞。楽しいお祭りの夜ですが、もう中学生の作者は、思春期のわきあがってくる気持を（狐のお面じゃ誤魔化せない）のです。かわいいときめきの詩。

大賞は二つとも女性の作品になりましたが、男の子はいろいろ乱反射していて、独自の顔を見せてくれていて、「やってる、やってる」とよろこばせてくれました。たとえば大坪恒貴さんの「あした」などは、八十すぎた選者は、びっくりかえってよろこびました。こどもっていいなあ！

市石和誠くん「いしっころ」、深谷然くん「ふしぎないもむし」も男の子そのものです。

中学生になると、みんな大人になりながら思いを深めるようになります。家村佳樹くん「出番をください」は構成力を示しながら、自分の叫びを率直に示しています。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「おとのちから」

鎌倉市立山崎小学校1年 工藤 志生さん

おとのちから、すくすく

かぜのおとをひきつける

おとをたどるほく

よるのもりで、ふくろうがなく

ぼくは、おどりだした

おどりつづけた

しかのあしおとがきこえる

おとのちからは、すくすく

あさになった

カーテンのあいだから、かぜがふく

中学生の部 大賞 「お祭りの夜」

福岡教育大学附属久留米中学校2年 宮原^{みやはら}さやかさん

カラン コロン 下駄のステップは
遠くに聞こえる 盆踊りの太鼓

金魚と一緒に ゆらゆら揺れる
君の背中を 狙って打ち抜く

空に浮かんだ 大輪の花は
ラムネの泡と パチパチ消えた

花火よりも 綺麗だよ

あなたの瞳に映った 私の顔は

狐のお面じゃ誤魔化せない
りんご飴より 甘い恋色

小学生の部 入賞

入賞 「あした」

大府市立共和西小学校1年 大坪 恒貴さん
おおつほ こうき

まんげつがでるよる

べつとにねると

あしたがくる

ままにおやすみっていうと

あしたがくる

あしたになつてたのしくなる

そのよるになると

あしたがたのしくなる

あさがきてたのしくなる

そして

よるねるときがきて

あしたがたのしくなる

あしたっていいな

入賞 「おとうさん」

鎌倉市立玉縄小学校1年 鎌倉かまくら 琉成りゆうせいさん

きょうおとうさんが おしごとぢやうと

うまくいったって。 ひーるのんだって。

でもへん。へん。

あんなにまいなち おしごとぢやうと

まだうまくなんないの？

りゆうせい は さっかー

かやうと もへようだけ。

すも どんどんうまくなってるよ。

おとうさん ちやうかたあつてゐる。

入賞 「ふしぎないもむし」

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校1年 深谷^{ふかや}然^{ぜん}さん

ぼくは、いもむしになったよ

どうやってなったかわかる？

それは、ふとんにまかれたから

おふとんにぐるぐるまかれて

つめたくていいきもち

おにくをたべる

ふしぎないの

ふしぎないもむしなんだよ

入賞 「くも」

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校2年 幸田 芙玖さんこうだ ふく

おとうさんに

木を切ってもらって

けずったら

くもにさして

わたあめにしよう

おやつをたべたら

こんどは おふろ

くもをとってきて

いっしょにおふろに入ろう

あわだらけで

どれがくもか

わからなくなっちゃった

おふろに入ったら

くもが

どんどん 水をすって

大きくなるよ

パチンとわれたら

また

小さなくもが

生まれる

お風呂に入るたびに

どんどん

かぞくがふえていく

くもを見つけたら

お風呂に入ろう

入賞 「いしっころ」

鎌倉女子大学初等部3年 市石 和誠さん
いちいし かずなり

げんこつみたいな

大きい石

米つぶみたいな

小さい石

宝石みたいな

ピカピカの石

ラクダのせなかみたいな

ぼこぼこの石

ぼくはいしっころが大好きだ

ぼくがようち園のころ

石をいっぱい集めてた。

ズボンのポケットに

こっそり入れて

するとね

ママが言ってたよ

「せんたくきからいしが出てきた」

ぼくはどきどき

知らん顔

入賞 「しゃぼん玉」

清泉小学校3年
齋藤 実桜さん

ぷーっとふいたら

ぷーっとあらわれ

ぷーっとふいたら

兄弟あらわれ

ぷーっとふいたら

目をさまし

ぷーっとふいたら

パチパチパチ

さようなら

入賞 「こたつ」

目黒区立碑小学校4年 五十嵐^い藍^あさん

ぬくぬく温ったまる

ネコが足をくすぐる

くっくっくっ
ii

けれどもがまんして

ミカンを最後まで食べなければ。

くっくっくっ
ii

わらってしまった。

「ポトッ」

ミカンを落としてしまった。

あゝ冬だから

ぬくぬく温ったまりたいのに

いろんなことが起る

ピンポーン♪

元気よくチャイムを鳴らす音

だれかなあ。

げんかんの前に行って

げんかんをあけると…

「こたつをかたづけして下さい。春ですよ。」

小鳥が言い去った。

入賞 「やい、イモリ おい、やもり」

沖縄カトリック小学校5年 倉橋 美帆さん
くらはし みほ

ボクはヤモリ、

あっちはニセモノ

ぼくはいもり、

あいつはにせもの

やい、イモリ、

ボクのマネするな

おい、やもり、

ぼくのまねするな

イモリはボクのマネをする

やもりはぼくのまねをする

やい、イモリ

おい、やもり

マネするな

まねするな

入賞 「いいなあ」

横浜市立並木中央小学校6年 加藤^{かとう}さなみさん

はあ

ずっと机に向かっていた

やさしく あたたかい風が

窓のすき間から

吹きこんできた

葉のかさなる音が

聴こえてくる

ふと外を見ると

まるで

下から見る飛行機のように

ゆっくりと

風と一体化するくらい

風に身をまかせ

黒真珠のような

鳥が 飛び去っていった

そして私は一声

いいなあ

それから

また 机に向かった

入賞 「やかん」

湘南白百合学園小学校 6年

渡邊 瑞紀さん
わたなへ みずき

やかんが悲鳴をあげた

やかんは耳をふさいだ

うるさいとつぶやいた

自分の声だと気づかず

やかんの口から湯気がでた

やかんは湯気をおいはらう

やめてくれとつぶやいた

自分の湯気だと気づかずに

やかんの前で

みんなが紅茶を飲んでいる

紅茶の香りがやかんを包む

やかんはみんながうらやましい

やかんはまわりを見わたした

鍋 フライパン 炊飯器

一体だれが？とつぶやいた

自分のわかした湯だと気づかずに

他のだれも教えてくれない

やかん自身が気づかなければ

気づけ やかん

君がみんなを幸せにしている

中学生の部
入賞

入賞 「短冊に光を」

日本大学藤沢中学校1年 青木 優奈さん
あおき ゆうな

明るいけど 輝かなくて

暗いけど 輝けて

昔はすぐそばにいたのに

どうして今は届かないの？

彼らが走れば 私は願ひ

彼らを見れば 心が晴れる

協力しあつて 川を作り

あなたとあなたが結ばれる

そんな景色が見られぬまま

一年に一度の日が 終わってしまうの？

悲しげなこの夜の空に

ひとつひとつが輝けるのなら

私は願う

ああ、いつかの空に

小さな光が

満たされますように

入賞 「雨」

湘南白百合学園中学校1年 今村 瞳子いまむら とうこさん

一杯になった天空の手から
こぼれ落ちるように

まるでせき止めていた堤が
決壊するように

雨は降りだした

あつという間にひかりが消え

木々が叩きつけられる雨音だけが

何重にも重なって

ぼわわんと遠くに聞こえる

しだいに流れは激しくなり

遠くに見えていた山をも

包み込む

一面白と灰色とかすかに緑

ざんざん降りの空の下

静かな時間が過ぎてゆく

入賞 「銀の水晶玉」

星美学園中学校1年 酒井彩華さん
さかい あやか

海中で

一つ私は泡をはいた

二つ私は泡をはいた

すべての泡をはき

私は上へ泳いでいく

銀の水晶玉のように

上っていく泡

海面から差し込む

海の太陽のような

陽の光のように

美しく輝いている

そして私は泡とともに

海面へと飛び出していく

入賞 「海と空」

小林聖心女子学院中学校1年 佐藤 祐伽さん

さとう ゆうか

こんなにも

美しい 海

あの 七十年前の

ヒロシマの海は

どんな色に

染まったのだろう

こんなにも

美しい 空

あの 七十年前の

ヒロシマの空は

どんな色に

染まったのだろう

こんなに青く

かがやいていたものが

どれほどの 赤に

染まったのだろう

忘れられない

あの日のことを

海と 空は

忘れはしない

人が 争いを するたびに

空は 雨を降らせ

海は 波を高ませ

泣くだろう

人が 争いを やめない限り

海と 空は

泣き続ける

だれかが

それに 気づくのを

海と 空は

待っている

だから 私も

平和のために

できることを

見つけたい

そして

ひとり ふたりと

たくさんの 人々が

気づいてくれることを

願っている

そのとき 初めて

海と空は

笑うだろう

入賞 「夏の庭」

ひまわり

ダリア

グラジオラス

花々は

くつきりと

鮮やかな色で

黄金虫は

その鋼の背で

光を照り返し

眩むような

日射しの中で

皆 力強く生きているのに

私だけが

淋しいふりをしている

星美学園中学校1年 鈴木^{すずき}るりかさん

入賞 「ゴルフ練習場」

作新学院中等部1年

水島 みずしま 知周 ともちかさん

ポーンといかない ぼくの球

コロコロころがるだけ

でも すぐに穴からあらわれる

太平洋までとんでいけ と

クラブをふるけれど

コロコロころがっていく

となりのおじさん

準備運動三十分

ドライバーをふって すっ飛ばした

本当に同じ球ですか

水平線までとんでいけ と

打ったけれど

飛ばずにおちて 残念な流れ星になった

練習場の白い星屑は

ため息でできている

みんな人の事など気にせず

白い球をひたすらたたいてる

ポーンとあてたら

世界が変わるかもしれないから

みんな ここにやってくるんだ

入賞 「歩道」

福岡教育大学附属福岡中学校2年 進藤 秀一朗さん
しんどう しゅういちろう

靴が鳴る 夜が来る

この地を踏むのは何人目か

僕は知らない

街灯が太陽ならば

雲になるのは僕であり

影が映るアスファルトを

僕は知らなくていい

滴る汗が染み込むのは

生まれ変わりゆく道

舗装されたら消えてしまうもの

僕が知る由もない

何回 削られて

何回 塗られて

何回 踏まれて

何回 濡れたか

僕は知りたくない

ただ新たな道を

分岐点が無数にあり

小石がない平坦な道を

僕は知りたい

でも知っている

この道しかないことを

だから歩くのだ

躓いても構わない

前へ進む進む

数多の星が見守る

僕だけの歩道を

入賞 「出番をください」

福岡教育大学附属久留米中学校3年 家村 佳樹さん
いえむら よしき

ジリリン ジリリン

ぼくは音に目が覚めた

目は叫んだ

「出番をください」

通学路

ぼくはバスに乗った

足は叫んだ

「出番をください」

数学の授業

ぼくは電卓を使った

頭は叫んだ

「出番をください」

ぼくらはいつから

体の叫びが聞こえなくなったのだろうか

足は、手は、頭は、内臓は、

目は、口は、耳は、鼻は

こう叫んでいた

「出番をください」

入賞 「ふせん」

福岡教育大学附属久留米中学校3年 井上 美里さん

いのうえ みり

この前貸した

あの本は

わたしの机に

置かれていました

変わりばえしない表紙に

一枚のふせん

小さく書かれたイラストと

君の文字

ふわりとゆるむ

わたしの頬

この前借りた

このノートは

君の机に

置いておきます

心を込めた

一枚のふせん

小さく書いたイラストと

感謝のきもち

思い浮かべる

君の口元

入賞 「旅」

立命館慶祥中学校3年

中島 誓琉さん
なかじま せいりゅう

「スタスタ」と

大地を踏んで歩いてく。

「タッタタッタ」

靴を鳴らして駆けていく。

どこに行くでもなく

何をするでもなく

ただただ見えない何かに向かって。

そこに何かあるのかもわからずに。

そして、ふと立ち止まる。

「私は何がしたいんだ」

「何に向かっていているんだ」

ということ

それでも私の目的地はわからない。

そして私はふと思う

目的地なんてないのでは？

そこでもう一度考える

「私は何がしたいんだ」

「何に向かっていているんだ」

ということ

そしてようやく気がついた。

目的地などないんだと

むしろないのが普通だと

変わりゆくのが普通だと

私が思うに人生は

そういうものではないだろうか。

大地をしっかりと踏んでいても

突然なにかに胸躍らせて

そこに向かって走っても

そこで道は終わらない。

生きる限りは途絶えない。

普段生活するなかで

自然と過ぎゆく毎日が

道になると思いつから。

まずは明日を生きていこう。

新たな道をつくるため

新たな未来へ進むため

悔い無き旅を終えるため

発行日 平成28年11月6日

編集・発行 鎌倉文学館指定管理者

鎌倉市芸術文化振興財団・

国際ビルサービス共同事業体

鎌倉文学館

鎌倉市長谷 1・5・3